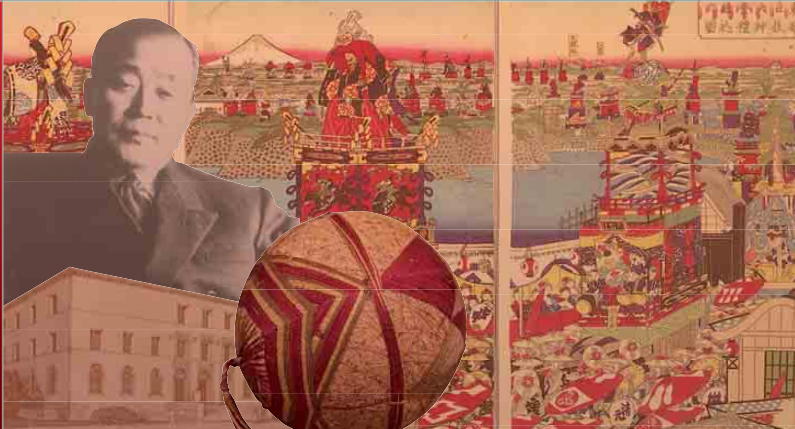


資料番号	表題	資料番号	表題	資料番号	表題
37TA-0063-0002	衣喰住之内家職幼絵解ノ図	37TF-0030-0086	分銅	37TI-0041	高野商店引札
	第一〔普請絵図書付〕	37TF-0034-0001	地球儀	37TI-0110	東京名所 海運橋五階造真図
37TF-0009-0019	字押捺器	37TF-0036-0014	型押器	37TJ-0260	坂本龍馬〔写真帳「文官・一般」〕
37TF-0015-0021	鏡台	37TF-0050-0002	銭成木	37TJ-0352	印刷局鈔紙部
37TF-0015-0026	酒筒	37TF-0050-0008	眼鏡	37TJ-0397	京橋区銀座三丁目
37TF-0016-0008	家庭輪（万年火フキ）	37TF-0050-0017	眼鏡	37TK-0059-07-01 ～ 03	準備室日記
37TF-0025-0020	龍吐水	37TF-0056-0002	ラジオ	37TK-0059-07-07,07-08	準備室日記
37TF-0029-0003	両替屋天秤（天秤台・分銅付）	37TF-0073-0021	鑑札	37TK-0059-04-06-03	一つの提案（カーボン写）
37TF-0030-0037	天秤	37TF-0077-0035	算盤	37TK-0059-00-A-01	購入品原簿 巻



日本実業史博物館研究の今後

このパンフレットは、日本実業史博物館研究の成果について、多くの方にわかりやすく理解して頂くことを目的に制作しました。連携研究は、人間文化研究機構の各機関が培ってきた研究基盤と成果を有機的に結びつけ、さらに高次の研究に発展させるために企画されました。特に、文化資源の高度活用は、機構内の機関が所蔵する文化資源、本研究の場合は「実博資料」を機構内外の機関や研究者との連携のもとに研究し、資源の共同利用を高度に推進しているところです。本研究の共同利用を高度に推進したことによる到達点としての成果の一部を以下に紹介します。

渋谷敬三は、「資料を学界に紹介・提供すること、そのための努力をする研究者の仕事を援助する・実現する」ことを標榜し、「理論づける前にすべてのものの実体を掴むことが大切」としてコレクションの収集に当りました。まさに人間文化研究機構に求められる姿勢にも通じる理念であり、多角的見地から追求する研究者が自らのあり方を問いつつ進める連携研究の真髄といえます。

今回は、洪沢敬三が追求めた「日本実業史博物館」構想に焦点を絞って解説しました。今後、他の博物館部門の再構成を企画しています。さらには、その全体像に迫る「復活！日本実業史博物館」に向けた研究を推進していきます。今後の研究の進展を楽しみにしてください。

- 青木陸責任編集『幻の博物館の“紙”-日本実業史博物館旧蔵コレクション展』（図録、人間文化研究機構国文学研究資料館編集・発行、人間文化研究機構連携展示費用による発行、2007年5月）連絡先・総務課企画広報係・電話（050-5533-2910）・メール（kikakukoho@nijl.ac.jp）、頒布価格1,000円
- 大学共同利用機関法人・人間文化研究機構のホームページ(<http://www.nihu.jp/>)においてDVD版「復活!日本実業史博物館 調査報告2006年」（12分、2007年6月）を公開し、DVD版「復活!日本実業史博物館 調査報告2007年・幻の博物館の“紙”-日本実業史博物館旧蔵コレクション展-」も公開の予定です。
- 昭和女子大学光葉博物館（研究協力増田勝彦昭和女子大学教授）編「淡沢敬三の夢-日本実業史博物館の資料“広告”」（2007年11月）。問い合わせは同博物館まで。
- 金山正子・青木 陸、文化財保存修復学会ポスター報告「複合的な素材を含む資料の状態調査法」（2007年5月）
- これまでの実博に関する研究成果の資料集「人間文化研究総合推進事業連携研究-文化資源の高度活用-「日本実業史博物館」資料の高度活用2007年度中間報告-資料編」（2008.3）があります。連絡先・総務課研究協力係・電話（050-5533-2911）・メール（study-ml@nijl.ac.jp）。



国文学研究資料館紹介

大学共同利用機関法人「人間文化研究機構」は、2004年に設立された研究組織で、国立歴史民族博物館(略称:歴博)、国文学研究資料館(国文研)、国立民族学博物館(民博)、国際日本文化研究センター(日文研)および総合地球環境学研究所(地球研)という5つの研究機関によって構成されています。

国文研は、2008年2月末に品川区戸越より立川市に移転し、4月より資料利用サービスが再開いたします。1階展示室では、さまざまな企画展示をお楽しみいただけます。

利用案内

資料利用の時間は、9:00～18:00、史料・貴重書の閲覧は9:30～17:30です。7月から土曜開館の予定です。ここで紹介した「日本実業史博物館旧蔵史料」の利用については、事前に学術情報課情報サービス係歴史資料担当まで電話(050-5533-2930)・メール(etsuran@nijl.ac.jp)で御願い致します。

- 実博資料は、ホームページ<http://www.nijl.ac.jp/>から「電子資料館」→「日本実業史博物館コレクション」の画像データベースでご覧下さい。



アクセス

- ・JR「立川駅」から徒歩25分
- ・多摩都市モノレール「高松駅」から徒歩7分

人間文化研究機構総合推進事業 連携研究－文化資源の高度活用－
「日本実業史博物館」資料の高度活用 研究成果パンフレット1

編 者 青木 睦「日本実業史博物館」資料の高度活用:研究代表
人間文化研究機構 国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町10-3
TEL 050-5533-2900(代)

発 行 大学共同利用機関 人間文化研究機構 2008年3月31日

編集印刷 株式会社丹青研究所／株式会社博秀工芸



沢三が遺した「幻の博物館からのメッセージ」

日本実業史博物館旧蔵
コレクション

人間文化研究機構総合推進事業 連携研究－文化資源の高度活用－
「日本実業史博物館」資料の高度活用

博物館構想の経緯と時代背景

渋沢栄一が1931(昭和6)年11月11日に死去した後、遺言によって渋沢記念財団竜門社が渋沢栄一郎の寄贈を受けた。現在の飛鳥山公園内にある、約8470坪ほどの敷地及び建物である。1937(昭和12)年5月、(財)竜門社は、旧渋沢栄一郎の利用に関する委員会を設置し、渋沢子爵家を栄一より継承した嫡孫の渋沢敬三ら9名に委員を委嘱する(当時41歳の敬三は(財)竜門社の評議員)。そして、この委員会は答申を提出し、同年7月15日に財団の理事会・評議員会において、「渋沢青淵翁記念実業博物館」の建設が決議される。この決議された計画案は、渋沢敬三の「一つの提案」にある「近世経済史博物館」の構想をベースにしたものであった。この時敬三は、「折角お爺さん(渋沢栄一)の為に財界の人達が御考え下さっている

ことは大変有難いことであるが、それならばそれを敷衍(より広く)した経済史的な博物館を、渋沢家も御手伝してつくりたい」と述べたという。そして博物館計画、資料の収集・保存管理までが一任されることとなった。



渋沢敬三は、日本銀行総裁、大蔵大臣、国際電信電話株式会社初代社長などと政財界で活躍すると同時に、柳田国男・宮本常一らと共に日本の民俗学・民族学を発展させた人物としても有名である。また、文部省史料館、国立民族学博物館などの設立を提唱し、膨大な資料を寄贈し、その基礎を築いた人物でもある。

さて、博物館の計画はその後、(財)竜門社の事業として動き出し、1939(昭和14)年5月13日、渋沢栄一生誕百年記念祭に際し、博物館建設の地鎮祭が挙行された。

けれども、時代はアジア・太平洋戦争の戦時下、この建設は、建築資材の入手困難等により、竣工には至らなかった。その後も「日本実業史博物館」の名称でもって、その設立に向け、資料の収集および展示・収蔵のための施設の設置場所の模索が続けられたが、実現されることはなかった。まさに「幻の博物館」となったのである。



No.37TF-0077-0035



No.37TF-0030-0037



No.37TF-0056-0002



No.37TJ-0260



No.37TJ-0352



No.37TJ-0397



No.37TF-0015-0021

No.37TF-0036-0014



No.37TK-0059-07-01~03,
07-07,07-08

No.37TK-0059-00-A-01

No.37TK-0059-04-06-03



No.37TI-0110

渋沢敬三の「一つの提案」について

1937(昭和12)年渋沢敬三執筆の「一つの提案」の草稿は、便箋26枚に、博物館の設立目的・組織・展示構成・建設規模・予算・資料収集方法・展示原則・展示案が認められている(当館7点[準備室アーカイブズ-37TK]、渋沢史料館1点所蔵)。やがて博物館計画は、この「一つの提案」におおむね沿って進められる。「一つの提案」に初めて注目したのは五十嵐卓氏である(企画展図録「日本実業史博物館をつくりたい!!」渋沢史料館編、2001.10)。

渋沢敬三は、この「一つの提案」のなかで、「近世経済史博物館」という名称を使用しながら博物館設立を構想し、「渋沢青淵翁記念室」「近世経済史展覧室」「肖像室」の設置を予定した。特に、江戸時代に焦点を当てた「近世経済史展覧室」を重視し、江戸時代の文化・文政期から明治期の日本を「経済史上最も画期的変化ノアリシ」時代として強調し、当該期の経済変遷や発展過程を具体的に表す資料の収集に取り組む指針を示している。具体的にどのような構想で収集準備を進めていたかの内容が「一つの提案」の中の「展覧予想」により窺うことができる。

このように「一つの提案」は、その後の日本実業史博物館設立計画の指針としての意味を持っており、渋沢敬三の博物館構想を分析するために欠かすことのできない史料である。

日本実業史博物館旧蔵コレクションの現在

寄贈時に、「絵画の部」「地図の部」「番付の部」「文書の部」「書籍の部」「竹森文庫」「古紙幣」「広告の部」「写真の部」「商業器具」に部門分けされ、「日本実業史料博物館準備室旧蔵資料」として収蔵された。現在は、①博物館準備アーカイブズ・②絵画・③写真・④番付・⑤地図・⑥古紙幣・⑦竹森文庫・⑧文書・書籍・⑨広告・⑩器物資料の構成である。全資料の目録情報化は完了し、電子画像化を進めた一部について、ホームページで公開している(<http://www.nijl.ac.jp/>から「電子資料館」→「日本実業史博物館コレクション」)。現在、詳細数量を分析中であるが、総タイトル数18,517件(37,853点)である。その概要を紹介しておく。

- ①博物館準備アーカイブズ[1,251点] 博物館準備室が作成・管理したアーカイブズであり、渋沢敬三の「一つの提案」や「購入品原簿」、「準備室日記」などが含まれる。
- ②絵画[1,629点] 幕末から明治にかけての産業経済・社会世相を画いた錦絵で、慶応3年以前のものが56件で他は明治期の刊行である。
- ③写真[2,506点] 明治から戦前の社会風景、人物(軍人・政財界・皇族など)写真である。博物館展覧構想の内の「肖像室」のための資料である。

④番付[261点] 社会現象全体を品評した見立番付が多いが、相場資料、統計表もある。

⑤地図[348点] 近世末から明治期を中心とし、交通、鉱山、都市図が含まれる。

⑥古紙幣[7,496点] 幕末発行の藩札(大名札)、寺社札など。

⑦竹森文庫[2,493点] 東洋経済新報記者であり、『索引政治経済大年表』の著者である竹森一則の収集にかかる明治期の政治経済に関する書籍群である。

⑧文書・書籍[11,117点] 各部門に関連する様々な資料や文献類、写真帳がある。

⑨広告[572点] 引札類165点、ちらし17点、広告17点、略暦引札27点、商標ラベル201点など。通信博物館の樋畑雪湖が交通関係・運送関係の広告の収集にあたっている。

⑩器物資料[10,180点] 製紙業に関する伊勢辰コレクションを含む産業経済に関する器物資料。商業に関する道具類が多い。看板類200点、講社札50点、鑑札500点、銭箱・千両箱110点、帳面箱・帳場筆箱・帳場机・船筆箱20点、算盤30点、銅印600点、金枰100点、分銅180点、矢立500点、行灯21点、などがある。

電子情報化により、情報共有化と今後の研究課題解決の新たな知見を生む基盤が整備された。我が国の近代黎明期における産業経済の技術、実業史に関する様々な器物資料・文献資料・映像資料が中心である。これらのモノ情報に関する記述分析を行うことによって「日本実業史博物館」設立経過の解明及びコレクションの全貌を復元し、連携展示さらにはあらゆる情報機能を活用して広く国内外に発信し、文化資源の高度活用の発展に寄与することを目指したい。「日本実業史博物館」の目指した意図の探求と、実業史に関する資料の多様な視点からの検討を通して、実業史という新研究分野を開拓し、我が国の近代化の一面を浮上させること企図している。

実業とは、学問・理論に対して農・工・商などの実地に行う生業、というほどの意味が込められた明治になって盛んに使われ出した言葉である。その実業の歩みを伝えるために収集された資料群が、日本実業史博物館旧蔵コレクションである。

資料番号	表題	年代	寸法 mm	資料番号	表題	年代	寸法 mm
37TI-0028	獅々印 金剛石盤看板ビラ		693×260	37TF-0074-0170	看板 [かずら処 / かづら半]		373×305×25
37TI-0099-0004	大丸屋呉服店ちらし		379×178	37TF-0074-0184	看板 [蠟燭]		860×283×283
37TI-0073-0004	明治十五年太陽暦引札	1881	382×241	37TF-0074-0178	看板 [下駄]		521×391×152
37TI-0073-0015	明治十九年略暦引札	1885	370×255	37TF-0074-0209	看板 [糸屋]		796×445×440
37TI-0015	楽善堂広告		370×248/370×245	37TF-0074-0192	看板 [石工]		522×169×35
37TI-0017-0005	(輸出用日本茶ラベル) RISING SUN.EXTRA CHOICEST JAPAN TEA		390×344	37TF-0074-0144	看板 [白鶴]		365×325×60
37TI-0016	魚がし水神祭図		528×383	37TF-0074-0171	看板 [えのぐ]		395×355×30
37TI-0014	引札雛型		379×263	37TF-0156	御銘酒附		173×59/246×314
37TI-0056	越後屋引札		275×380	37TF-0265	駿河町越後屋引札		173×224
37TF-0074-0131	看板 [茶]		740×510×62	37TF-0036	蚕業器械販売広告	1890	383×513

実博コレクションの「ポスター」「ラベル」

ポスターは、現在は、「ビラ」と「ちらし」が殆ど同じ意味になっているが、本来は、ビラは貼るもの、ちらしは配る物と、異なる広告媒体を意味していた。今日のポスターの呼称は、大正末年からであるが、現代の呼称と混乱することを防ぐために、本誌ではビラを含めて貼り出す広告をポスターとした。

ラベルは、「広告」資料における商品容器の箱など、包装物に貼り付けた、多くの商標ラベルである。明治、大正時代は茶の輸出が盛んであったことを物語る、英文で書かれた茶のラベルが特に目に付く。

- 引札雛型 (No.37TI-0014) 色刷木版 蛸山写 巨巖の上部に龍がのぞき、周囲には松竹梅を配して、背景には旭日と宝珠を持った女神を描いてある。中央の巨巖は白抜きになっていて、ここに注文主の店名や営業種目などを挿入したのである。
- 明治十九年略暦引札 (No.37TI-0073-0015) 回漕業北国屋幌山善兵衛赤間関西南部町 明治18年11月2日 刷・林友太郎・上新川郡富山石倉町十四番地 一部色刷 上部に海上の旭日を背景にした七福神の宝船、下段の右半分に略暦、左半分に商家の店名、住所などを記してある。明治5年が最後の太陰暦となるので、太陽暦ということになる。
- かつら屋 (No.37TF-0074-0170) 髪の毛で悩むのは今も江戸の人も同じだったのだろう。これは、町人鬘の形を板に彫った「かつら屋」の看板である。顔の部分には「かづら半」と入っている。かつらの出来栄えが職人の腕前によるので、看板に名前を記していたものもある。
- 糸屋 (No.37TF-0074-0020) 糸屋の看板は、糸枠に緑・黄・紅・白・黒など各種の色糸を巻いたものを模して作られ、店頭に吊り下げられた。看板の糸数や色の順序には決まりはなく、本品は5色である。糸屋では織り糸や縫い糸のほかは武家の組糸である刀の柄糸・下緒なども扱ったという。
- 獅々印 金剛石盤看板ビラ (No.37TI-0028) 発行・東京近文 藍地に白抜文字 細長の中形紙を使ってあり、現今のポスターように建造物などに張り出したものであろう。左下には「特約店」とあって、その下は白紙になっている。製造元と契約した小売店名を後から記入する形式なのである。特定商品の配布用として製作されている。品名の右肩に「学校用優等品」とあるように、明治政府の義務教育制が実施された段階で、筆記用具として、書いては消して何度でも使用できる石盤は、紙のノートを使えるようになる以前の必須の道具であった。

「日本実業史博物館」と「アチック・ミュージアム」

日本実業史博物館構想が断念され、「幻の博物館」となった後、その準備室が収集したさまざまな資料は、昭和26年(1951)に文部省史料館(旧・国文学研究資料館史料館〔通称・国立史料館〕の前身)に一括寄託された。そして渋沢敬三が没する前年の昭和37年(1962)9月、正式に寄贈となり現在に至っている。一方、実博資料と共に、渋沢敬三が資料形成に大きく貢献した「アチック・ミュージアム」資料は、「日本民族学協会付属民族学博物館」資料となり、保存公開施設の設立に向けた模索が続けられた。昭和37年に「アチック・ミュージアム」資料は、文部省史料館の収蔵となり、1962年から1975年の13年間、文部省史料館の新設収蔵庫(元・北館)に実博資料と同居することとなった。1975年12月、前年に創設された国立民族学博物館へと搬入された。そうした経緯もあり、「日本実業史博物館」資料を「アチック・ミュージアム」資料の片割れと誤解する方々がじつに多いのである。

「日本実業史博物館」資料も「アチック・ミュージアム」資料も最終的には渋沢敬三自身が設立に尽力した文部省史料館と国立民族学博物館の収蔵と帰し、人間文化研究機構にまとまることとなったのである。



国文学研究資料館紹介

大学共同利用機関法人「人間文化研究機構」は、2004年に設立された研究組織で、国立歴史民族博物館(略称:歴博)、国文学研究資料館(国文研)、国立民族学博物館(民博)、国際日本文化研究センター(日文研)および総合地球環境学研究所(地球研)という5つの研究機関によって構成されています。

国文研は、2008年2月末に品川区戸越より立川市に移転し、4月より資料利用サービスが再開いたします。1階展示室では、さまざまな企画展示をお楽しみいただけます。

利用案内

資料利用の時間は、9:00～18:00、史料・貴重書の閲覧は9:30～17:30です。7月から土曜開館の予定です。ここで紹介した「日本実業史博物館旧蔵史料」の利用については、事前に学術情報課情報サービス係歴史資料担当まで電話(050-5533-2930)・メール(etsuran@nijl.ac.jp)で御願い致します。

- 実博資料は、ホームページhttp://www.nijl.ac.jp/から「電子資料館」→「日本実業史博物館コレクション」の画像データベースでご覧下さい。



アクセス

- ・JR「立川駅」から徒歩25分
- ・多摩都市モノレール「高松駅」から徒歩7分

人間文化研究機構総合推進事業 連携研究－文化資源の高度活用－「日本実業史博物館」資料の高度活用 研究成果パンフレット2

編 者	青木 睦「日本実業史博物館」資料の高度活用:研究代表 人間文化研究機構 国文学研究資料館 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 TEL 050-5533-2900(代)
発 行	大学共同利用機関 人間文化研究機構 2008年3月31日
編集印刷	株式会社丹青研究所／株式会社博秀工芸



客寄せ・話題の切り札 看板・引札・ポスター

国文学研究資料館所蔵「日本実業史博物館コレクション」(「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」)の内、「器物」資料(37TF)の中

の看板の一部と「広告」(37TI)にある引札・ポ

スターを紹介する。いままでは知られることがなかった渋沢敬三の日本実業史博物館に対する構想の一部を見ていただくと同時に、看板や引札などから当時の町並みや人々の暮らしに思いをはせてほしい。

渋沢敬三の広告観-「広告の発展をたどり」「失敗史は書けぬものか」



渋沢敬三は、「媒体を用いて需要家に周知をせしめて購買心を起こさせる手段」が「広告」であるとして、時代を華やかに照らす鏡としての広告を精力的に収集している。その反面、広告の裏側を見すえ、モノづくりの「真の成功は失敗を率直にかつ科学的に究明した上で築かるべき」という視点も持ち合わせた人物であった。さまざまな意匠・形態の広告・看板を通し、経済発展とモノづくりを見直すメッセージを感じることができる。

渋沢敬三は、1955(昭和30)年に電通主催夏季大学において、「日本広告史小考」(「渋沢敬三著作集」第3巻 平凡社 1992.10)と題して講演を行い、日本における広告の歴史を概観している。その講演の冒頭、「広告の意味」の中で次のように言っている。

「広告はどこまでも、商品があつてそれをある媒体を使って広告する。ときには商品自身がその媒体をすることもあるが、新聞なり雑誌なりラジオなりテレビなり、あるいは看板なりといったような媒体を用いて需要家に周知せしめて購買心を起こさせる手段である。こう見ていだろうと思うのである。これはいろいろ詳しく学問的に究明しますと、この定義には物足らぬところが出るかもしれないが、ごくおおざっぱに言ってそう言えると思う。」

ここでは「媒体を用いて需要家に周知せしめて購買心を起こさせる手段」が「広告」であるとの認識で、商品を有さない周知広報の「宣伝」との差を強調している。

また、渋沢は、この講演で、《石山寺縁起絵巻》、《一遍上人絵伝》、《直幹申文絵詞》、《四天王寺扇面古写経》、《七十一番職人歌合》、《日本山海名物図絵》、《守貞漫稿》、《洛中洛外図屏風》などに描かれた商売風景の図版に加え、資料収集当時の商人達の写真を紹介している。これらの絵巻などの美術品を、実業史に関わる「広告」の資料として捉えていたからであろう。その渋沢の姿勢は、実業史関連資料の情報化の集大成である『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂にも共通するものであったと思われる(渋沢は『絵巻物による日本常民生活絵引』の発刊を待たずに世を去った)。

さらに、講演の中で、物売りの声、口上も広告の一種として概説している。その姿勢からは、ラジオ、テレビなどの新しいメディアを意識して歴史を振り返っている様子が伺える。渋沢が去って45年あまり過ぎた現代、広告の範囲は非常に広がり、電子機器を含む様々な形を持つ媒体によるだけでなく、情報が意識されずに直接感覚などに訴える手段さえ見られる。この状況を渋沢はどの様に評価するであろうか。



「広告」資料の特徴

「広告」資料は、572点あり、引札類165点、ちらし17点、広告17点、略暦引札27点、商標ラベル201点などである。「日本実業史博物館コレクション」は、ホームページで公開している(<http://www.nijl.ac.jp/>から「電子資料館」→「日本実業史博物館コレクション」)。現在、詳細数量を分析中であるが、総タイトル数18,517件(37,853点)である。

なお、他の「絵画」部門の中にも広告資料としてまとめるべき物が含まれており、その数量の確定のため、調査研究を進めているところである。例えば、書籍の部にある貼込帳28冊が収録されているものの多くは引札、商標であり、その総数3,805点に達する。それだけでも現「広告」資料の8倍近い数字となってしまう。また、本誌に掲載した看板は、当然広告に含まれるものであるが、器物資料として部門分けされている。

「広告」資料の収集者を調査したところ、多くは「うさぎや」「粹古堂」などの古書店である。時に、通信博物館の樋畑雪湖が交通関係・運送関係の広告を収集して収めている。これらの広告も短期間に、各人の専門に取り扱う分野に特化しつつ収集が進められたことが窺える。昭和12年からと収集時期が特定され、資料が語る世相や社会を分析する資料として、また博物館の展示としてもさまざまな分野の参考資料となる物ばかりである。渋沢敬三が抱いていた近世経済史、実業史を概観する資料としての役割を一枚一枚が果たしている。民俗学調査の調査収集方法とは異なるが、渋沢が夢見た博物館に求められる物を収集担当者達は開館の時間に迫られつつ集めたことが理解される。これまでに公開の機会が少なく、このような希有なコレクションの価値を知っていただければと願う。

「広告」資料の基礎研究には、原島陽一「日本実業史博物館準備室旧蔵資料のうち『広告の部』について」(『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第1号2005.3)があり、本誌解説の参考とした。

実博コレクションの「看板」

商店が、店名や業種を外部に知らせるための道具として、暖簾とともに店先に掲げられたのが、看板である。

渋沢敬三が「日本広告史小考」のなかで掲げているように、鎌倉後期の制作とされている「直幹申文絵詞」に描かれた商店では、商品を店先に並べるだけで暖簾や看板は見あたらない。いわば「実物展示」の段階である。その後、16世紀中期の京都の様子が描かれた上杉家本「洛中洛外図屏風」になると、烏帽子屋に烏帽子の絵の看板、筆屋に筆の絵の看板が見られる他、川越喜多院蔵「職人尽図」には、軒下に吊り下げられた小型の絵馬形や長方形の看板が描かれ、本誌掲載の越後屋の引札には、軒先に掲げた文字看板が描かれている。他の引札にも屋根付けの看板など、さまざまな意匠を工夫した看板図がみられる。引札の中に看板の世界を見ることができる。商店の店名や業種を外部に知らせるための道具として店先に掲げられた暖簾は、看板である。

看板は、文字を読めなくても解る、具体的に絵を描いた「絵看板」、商品の形象をかたどった「実物看板」・「模型看板」と呼べる物が普及した。後に文字を主体とした「文字看板」が主体となったとされている。

実博コレクションの「引札」

引札とは、「ちらし」と同意の、それより古くから呼ばれていた名称で、自店名と商品の宣伝を入れて配布した刷り物のことである。江戸での引札の対して、大阪では「ちらし」と言ったとの説もある。明治初年発行の新聞では、現在の広告欄を引札欄と呼んでおり、当時の引札の語は、刷り物だけでなく宣伝行為も含んでいた。

初期の引札では、越後屋(現・三越)が1683(天和3)年江戸の日本橋駿河町に開店した時の、「現金安売かけ値なし」の墨一色で刷られた引札が有名である(本誌では越後屋の店名(1673-1893)の引札を掲載した。三井呉服店名(1893-1904)の彩色ポスターも所蔵している)。出来合の引札も多く作られ店名などを後から刷り足して使われた。絵柄のあるハガキに名前だけ印刷する近年の年賀状と趣旨は同じであろう。

引札が色刷りになっても基本的には木版で、明治、大正初期にまで続く。輸入技術による引札も従来の木版による引札に交じって明治以降に制作されるが、大正以降は活版印刷に依る引札、即ち「ちらし」が大勢を占める。引札とちらしは製作者の意識と一般の呼称の問題なので個別に引札かちらしかの判別に困難を感じる資料があるが、本誌では、大正以降の活版印刷に依った印刷物を「ちらし」とした。

資料番号	表題	年代	寸法mm
37TF-0077-0029	算盤(中国)	19世紀後期推定	282×175×26
37TF-0077-0011	算盤(大津)	1750-1800年頃	550×127×33
37TF-0077-0023	算盤(播州)	明治大正期	382×110×38
37TF-0010-0024	懸硯(硯箱 算盤付)		
37TF-0077-0027	算盤(産地不詳)	現代	227×134×37
37TF-0077-0003	算盤(長崎)	1800年前後	370×181×50
37TF-0077-0035	算盤(播州・銭の計算器付算盤)	幕末	171×70×20
37TF-0077-0034	算盤(産地不詳・料理屋の算盤)		465×650×100

「日本実業史博物館」コレクションの形成過程

1939年「渋沢青淵翁記念実業博物館」地鎮祭の前年、「一つの提案」をコレクション形成の基本とした資料収集が本格化し、1,314点と最高の購入品数となっている。収集の第一番目は、1937(昭和12)年6月12日付、うさぎや納品の錦絵36点である。一方のアチック資料の収集は、日本民族学会付属民族学博物館の開館する1939年にはば終了する。

資料収集は、土屋喬雄(帝国大学経済学部教授)、樋畑雪湖(通信博物館主任)、樋畑武雄、遠藤武(元東京帝室博物館)等とともに、甲州文庫功力亀内、粹古堂伊藤敬次郎、うさぎや書店原田忠一、木内書店木内誠が収集活動にあたった。アチックと実博資料の収集方法は異なり、前者は主として民俗学の研究者達による調査収集であり、後者は古書店・古物商などに依頼して購入するのが8割を超える。よって、採集地や収集経緯が判然としないが、購入金額や納入者とその時期に関する記録が残されている。(財)竜門社の事業の一環であることから、購入経過会計帳簿記録が詳細である。このことが実博コレクション形成の特徴といえる。

購入資料の選定の場面を「準備室日記」みると「昭和拾四年十二月拾壹日 晴、月、小林、遠藤出勤。甲州文庫来訪。功刀氏初対面。持参セシモノ、和紙手漉用具以下、見タルモサシテ欲シキモノナシ。午后、古書店二行キシ藤木氏ト共ニウサギ屋、粹古堂来訪。(中略)渋沢氏来室、小林留守」と、紙漉用具を甲州文庫が持参し、古書店や渋沢の来室が記録されている。この紙漉用具は、「購入品原簿」で12月28日に支払いが済んでいる。1940年2月13日火曜日は、「小林、遠藤出勤。粹古堂、錦画持参。甲州文庫再訪。甲州文庫分ダケ決定支払済。渋沢氏再来室、午后四時半迄かり粹古堂決定」とあり、渋沢自身が時間をかけて錦絵選定を行っている様子が窺える。他の記述からも、渋沢の判断に従って行われていた。場所は準備室の置かれた渋沢が頭取を務める第一銀行の一室である。

- 青木睦責任編集『幻の博物館の“紙”-日本実業史博物館旧蔵コレクション展』(図録、人間文化研究機構国文学研究資料館編集・発行、人間文化研究機構連携展示費用による発行、2007年5月)連絡先・企画広報係-・電話(050-5533-2910)・メール(kikakukoho@nijl.ac.jp)頒布価格1,000円
- 大学共同利用機関法人・人間文化研究機構のホームページ(<http://www.nihu.jp/>)においてDVD版「復活旧日本実業史博物館調査報告2006年」(12分、2007年6月)を公開し、DVD版「復活旧日本実業史博物館調査報告2007年-幻の博物館の“紙”-日本実業史博物館旧蔵コレクション展」も公開の予定です。
- これまでの実博に関する研究成果の資料集『人間文化研究総合推進事業連携研究-文化資源の高度活用-「日本実業史博物館」資料の高度活用2007年度中間報告-資料編』(2008.3)があります。連絡先・総務課研究協力係-・電話(050-5533-2911)・メール(study-ml@nijl.ac.jp)。
- 実博コレクションの展示図録
近藤雅樹・編『図説 大正昭和くらしの博物誌 民族学の父・渋沢敬三とアチックミュージアム』河出書房新社、2001年、横浜市歴史博物館「屋根裏の博物館 実業家渋沢敬三が育てた民の学問」2002年、渋沢史料館「企画展 日本実業史博物館をつくりたい!-渋沢敬三の構想と残された蒐集品」2001年、昭和女子大学光葉博物館編『渋沢敬三の夢-日本実業史博物館の資料“広告”』2007年

資料番号	表題	年代	寸法mm
37TA-0534-0534	金のちる木 金のなる木	1847～1852	376×256
37TF-0077-0018	算盤(雲州or広島)	明治期	336×140×55
37TF-0077-0028	算盤(長崎)	幕末	295×140×50
37TF-0077-0019	算盤(博多)	幕末	616×123×30
37TF-0077-0013	算盤(堺)	1700年代	515×148×57
37TF-0077-0031	算盤(播州)	幕末	199×148×53
37TF-0077-0032	算盤(中国)	(年代不詳)	343×180×27
37TF-0035-0075	旅枕		



国文学研究資料館紹介

大学共同利用機関法人「人間文化研究機構」は、2004年に設立された研究組織で、国立歴史民族博物館(略称:歴博)、国文学研究資料館(国文研)、国立民族学博物館(民博)、国際日本文化研究センター(日文研)および総合地球環境学研究所(地球研)という5つの研究機関によって構成されています。

国文研は、2008年2月末に品川区戸越より立川市に移転し、4月より資料利用サービスが再開いたします。1階展示室では、さまざまな企画展示をお楽しみいただけます。

利用案内

資料利用の時間は、9:00～18:00、史料・貴重書の閲覧は9:30～17:30です。7月から土曜開館の予定です。ここで紹介した「日本実業史博物館旧蔵史料」の利用については、事前に学術情報課情報サービス係歴史資料担当まで電話(050-5533-2930)・メール(etsuran@nijl.ac.jp)で御願い致します。

- 実博資料は、ホームページ<http://www.nijl.ac.jp/>から「電子資料館」→「日本実業史博物館コレクション」の画像データベースでご覧下さい。



アクセス

- ・JR「立川駅」から徒歩25分
- ・多摩都市モノレール「高松駅」から徒歩7分

人間文化研究機構総合推進事業 連携研究 -文化資源の高度活用-「日本実業史博物館」資料の高度活用 研究成果パンフレット3

編 者	青木 睦 「日本実業史博物館」資料の高度活用:研究代表 人間文化研究機構 国文学研究資料館 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 TEL 050-5533-2900(代)
発 行	大学共同利用機関 人間文化研究機構 2008年3月31日
編集印刷	株式会社丹青研究所／ 株式会社博秀工芸



No.37TF-0077-0029



No.37TF-0077-0011



No.37TF-0077-0027



No.37TF-0077-0003



No.37TF-0010-0024



No.37TF-0077-0023



No.37TF-0077-0034

富と利殖の象徴 算盤そろばん

渋沢栄一

論語と算盤は甚だ遠くして甚だ近いもの

人間文化研究機構総合推進事業 連携研究 -文化資源の高度活用-
「日本実業史博物館」資料の高度活用

No.37TF-0077-0035

渋沢栄一 論語と算盤

日本実業史博物館旧蔵コレクションの「器物」資料は4,993件(10,180点)あり、その中に実用の算盤が35挺ある。その他、懸硯・旅枕などのように一部に算盤を組み込んだものや算盤の看板も含め、収蔵の算盤実物と関連資料を合わせると50点を超える。

有名な産地の算盤が収集され、算盤の特徴や技法、産地ごとの製作技法が比較できるコレクションである。まさに渋沢敬三が「理論づける前にすべてのものの実体を掴むことが大切」と提唱した方針に基づいた算盤であることを実感する。

富と利殖の象徴 算盤そろばん



算盤の収集者は、1938(昭和13)年に甲州文庫（山梨県立博物館蔵同名文庫の寄贈者）の功刀亀内が16挺、杵古堂(古書店)1挺、三木栄一郎6挺を購入して収めている。一年間という短期間にほとんど甲州文庫が集めている。三木栄一郎の播州算盤7挺は、岡山市での購入品である記録が購入台帳に残されている。

渋沢敬三の祖父である渋沢栄一は、講演において「論語と算盤は甚だ遠くして甚だ近いもの」と話している。『論語』をより所にして「道徳と経済」=「論語と算盤」の一致を唱えた『倫理家』であるとも称される(P.F.ドラッカー)。

渋沢栄一は、「論語にはおのれを修め人に交わる教えが説いてある。-私は論語の教訓に従って商売をし、利殖を図ることができると考えた。私は不斷にこの算盤は論語によってできている。論語はまた算盤によって本当の富が活動されるものである。ゆえに論語と算盤は、甚だ遠くして甚だ近いものであると終始論じている。-道理と事実と利益を必ず一致するものである。-富をなす根源は何かといえば、仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することはできぬ。ここにおいて論語と算盤という懸け離れたものを一致せしめることが、今日の緊要の務めと自分は考えている(角川文庫『論語と算盤』から引用)。

本誌掲載の算盤(No.37TF-0077-0011)は、傲岸不遜の末、闕所となった淀屋辰五郎遺品である。利殖の象徴としての算盤に、経済活動のあり方の教訓を重ね合わせてみると、論語=倫理、算盤=経済の意味を考えさせられる。現代の倫理なき経済金融活動を渋沢栄一は何とみるでしょうか。「今日の緊要の努め」は何であると説くのでしょうか。

損益を計算する算盤の各地の特徴ある形と技法を見ていただき、日本実業史博物館資料として収集した算盤を様々な観点で見ることができる。

算盤に関する解説

中国・日本・南北朝鮮のほか東南アジア諸国で使われている計算器具。算盤・十露盤という字が多く使われるが、現在までに50種のあて字が見つかっている。そろばんは中国音スアンパンの訛りという。中国から室町時代末期に舶載されたと考えられている。算盤の前身は珠算で、東漢時代には存在し、五珠が一つ、一珠が四つで、五珠と一珠を区別する梁はなかったという。現在の中国で使われている五珠が二つ、一珠が五つの算盤は元代には存在し、その発生は宋代以前と推定されている。日本へ伝来した算盤は、珠の大きさも不揃いで、その例が前田利家が名護屋の陣中で使用した算盤である。現存最古の算盤として前田家の尊経閣文庫に収蔵されている。

後に、摂津・肥前・大津、長崎・博多・雲州・播州・芸州・大津などが江戸時代の産地で、五珠二つの他、一つも作られた。1893(明治26)年に西川秀次郎が一珠四つの必要性を説いてから大論争が展開された。1938(昭和13)年、文部省の国定教科書が小学四年生の算術の授業に暗算と珠算も指導するようになり、一珠四つのものを使わせたので現在の算盤が普及した。

算盤の数え方は、一挺・丁(ちょう)、一面、一台である。

No.37TA-0534



「金のちる木 金のなる木」

蓄財と、浪費をいましめる教訓を説くことは、近世中期に成立する心学が、町人らへの処世訓として、さまざまに変容しながら普及していった。処世にとってもっとも大切なものとして金銭を挙げて、それを端的に“金のなる木”と“金の散る木”と表現して、近世後期に流行した盆栽趣味を利用して図案化したのが本図である。“金のなる木(気)”の発想は、黄表紙や滑稽本にも扱われており、本図の独創ではない。幹にあたる中心“いきをゐよき、ばんじをもしろ木”左側の善心の金のなる木の側は“しんほうつよ木”“ゆだんのな木”“よろずほどよ木”“しんじんよろし木”“ばんじつうゑな木”

右側の悪心の金のちる木の側は、“しんじんなんぞハをらやだよ”とすべてに末尾に“おらやだよ”がつく以下“あさおき”“しごと”“うなぎでのまなくちゃ”“かせぐこと”と続く。

“なる木”側の枝についている葉は小判と宝珠、“ちる木”側は和鉈や鰻の蒲焼や櫛笄などで、正と負を表現する。

さらに、この植木鉢を前にして“なる木”側では商人が算盤を使って帳面に忙しく、背後には千両箱が山と積み上げられている。一方の“ちる木”側には三味線を弾く女性の前に酒徳利と酒の肴の竹皮包みがおかれて、散財の形態を暗示している。(解説:原島陽一 資料No.37TA-0534年代:推定1847～1852年 絵師:芳艶 版元:沢幸板 寸法:376×256mm)

旅枕(枕・算盤・行燈等)

この旅枕は、箱枕の形で軽量化して長道中に備え、貴重品入れの枕として用いられた。3段の抽斗付で盗難防止のためのタテ引きヨコ引きなどの隠し細工が施されている。算盤だけでなく小型の行燈や鏡が組み込まれ、銭・ローソク・筆記具・帳面など旅の諸道具を収納できる巧みな工夫をこらした面白い枕である。(No.37TF-0035-0075)



No.37TF-0035-0075



長崎算盤 No.37TF-0077-0028



博多算盤 No.37TF-0077-0019



堺算盤 No.37TF-0077-0013



雲州算盤 No.37TF-0077-0018



大津算盤 No.37TF-0077-0011



播州算盤 No.37TF-0077-0031



中国算盤 No.37TF-0077-0032

大津算盤(No.37TF-0077-0011)

豪商といわれる淀屋は、大坂を拠点に活躍した。淀屋橋の名の所以である。5代目淀屋三郎右衛門(廣當、通称辰五郎 貞享元(1684)年?～享保2(1717)年12月21日推定)が莫大な淀屋の家督を引き継いだのは元禄15(1702)年であり、宝永2(1705)年に淀屋は闕所(けっしょ)となる。財産をすべて没収され、大坂から所払いとなった。その理由が「町人の身分に過ぎた振る舞いがあった」というもの。辰五郎はわずか1年半の内に1万貫(現在の約100億円推定)にものぼる遊興費を使うなどしたという伝承があるが、歴史の教訓として語り伝えられた色彩が濃く、今後の検討が必要とされる。(参考:『国史大辞典』)

この算盤には、遺品の由来を示すために書かれた「淀屋辰五郎闕所品目録」(封筒1.仮綴1冊)と、さつまや算盤店のしおりが付属して箱内に収められていた。このことから算盤は、さつまや算盤店より甲州文庫が購入したものと推測される。昭和13年に実博では4円で購入している。箱書「淀屋辰五郎遺品」の墨書。1750-1800年頃横550×縦127×高33mm箱蓋付き。桁に割竹を使用。座(台の部分)に黒檀を使用。ホゾは三角・四角を使用。(No.37TF-0077-0011)

【長崎算盤】 産地 長崎県

博多算盤との区別は難しい。博多の方が座高が高いという見方がある。播州算盤と作りが酷似する。珠は平ら。篠竹を丸のままで使用するため桁は太い。短い桁のものは少ない。五珠二つが普通。21～30桁のものが多く、標準品は25桁。明治以降の生産はほとんどない。枠は外側に向って傾斜(内側より外側が低い)。凹錐珠はなく、平錐珠か凸錐珠。裏小板は梁に嵌めこむが、少し出っ張る。珠は桎目材を使用。四隅の接手は斜め組み。

【博多算盤】 産地 福岡県

長崎算盤との区別は難しい。播州算盤と作りが酷似する。

【堺 算 盤】 産地 大阪府

つくりは播州算盤に似ている。四隅に金具(銅)を嵌める。斜め組み。年代的に古いものが多い。

【雲州算盤】 産地 島根県

年号記入のものが多く、名工製作でその銘記があるものがある。20桁以下の短い桁が多い。五珠一つが着通。広島・長崎珠算に比べ珠が小さく、現代の算盤型が多い。

【大津算盤】 産地 滋賀県

製作名はほとんどなく、年号記入のないものが多いが、制作者銘入りの貼紙がつく場合ある。貼る位置は作者によって異なる。珠が小さく、長桁のものが多い。31桁以上に長桁のものはまず大津算盤と推定される。

【播州算盤】 産地 兵庫県

製作者名はほとんどない。長崎・博多算盤に類似する。裏の小板の表部分に小棒(凸起)がある。珠は大津・雲州算盤と差がないが、大津よりガタツキがない。珠の材質が良いものが少ない。桁は割竹を使用。播州算盤で桁に丸竹を使うのはめずらしい。長い桁のものが多く、27桁が標準、他所に比べ珠が幾分小さく、五珠二つが普通。31桁以上の長桁のものが作られる。四隅の接手は斜め組み。分業制のため、部品に数字が記入されている。大型の算盤(算盤看板や指導用算盤などは、主に播州算盤。幕末以降は播州算盤が多い。

【その他の算盤】

広島算盤、大阪算盤、名古屋算盤、東京算盤などがあるが、当館蔵には確認されていない。

【中国の算盤】

中国の算盤の特徴は、珠が回転楕円体の形である。

【参考資料】

本誌の算盤解説と産地や形態の特徴については、『国史大辞典』、須藤昭男『古そろばんの鑑定』(算盤史研究学会発行 2008.3)、山崎与右衛門編『東西算盤文献集』2、鈴木久男『珠算の歴史』、同『古そろばんの研究』、山崎与右衛門・竹内乙彦・鈴木久男『日本のそろばん』、戸谷清一『日本珠算史』(『珠算教育ハンドブック』15)、鈴木久男『中国における算盤の起源』(『珠算史研究』3)を基本資料とした。なお、連携研究として算盤史研究学会との合同調査を平成18年に実施した(研究協力須藤昭男・太田敏幸両氏)。

拾われたアーカイブズー公文書拾遺

「祭魚洞文庫旧蔵水産史料」には、廃棄された公文書が多く存在する。その収集について宮本常一は、「(敬三は)多くの人々が見落としているもの、見落としている社会に注目した。水産史や塩業史の調査に力をそそぎ、資料蒐集に全力をあげたのもそのためであり」「主として官庁などで廃棄される紙屑の中から拾いあげた資料がきわめて多かった。とくに水産関係の資料は、紙屑の中から見出したのが半ばをしめたといってもよかった。官庁で忘却の彼方へ押しやろうとしているものの中に、民衆の側から見れば忘れてはならないものが多数含まれており、しかもその中に将来を予見する価値のあるものが少なくなかった」と懐述している。

企画展では、拾い集められた全容を見ていただくため、簿冊をまとめて展示した。農商務省「(製塩井ノ粕図解)」には、東日本大震災で甚大な被害を受けた三陸沿岸の製塩に関する記述があり、失われた過去を知る希少な資料となった。公文書が地域の人々の記録であることを如実に語っている。[参考文献:加藤幸治「武蔵保谷村だより」(第10号、2013年)、宮本常一『著作集50渋沢敬三』(未来社、2008年)]

アチックミュージアムから 国立民族学博物館へ

アチックミュージアムは、渋沢敬三が主宰した博物館兼研究所である。大正初年頃、渋沢が友人らと東京・三田にあった自邸の一隅の屋根裏部屋に玩具などを収集したことに端を発する。昭和初年には、邸内の独立した建物に民具を収集し、若い同人を集め、民具や民俗学・民族学の研究を行い、1935(昭和10)年前後から日本水産史の史料収集と研究も行うようになった。

1935(昭和10)年、敬三は白鳥庫吉らと日本民族学会を設立し、国立民族博物館構想を政府に陳情するも戦局の悪化からこれが叶わず、1937(昭和12)年、高橋文太郎とともに建設した日本民族学会附属研究所・附属民族学博物館に、アチックミュージアムに収蔵されていた二万点を超える民具標本類を移転させて日本民族学会にそれらを寄贈した。しかし、運営・維持することは難しく、また、自らの死期を悟った敬三は、1962(昭和37)年、その資料を文部省史料館へと寄贈し、将来に国立民族学博物館が設立された時には、これらの資料を移管することを言いおいた。

1962(昭和37)年から1975(昭和50)年の13年間、大阪の国立民族学博物館が設立されるまで、資料は品川区戸越の文部省史料館の北館に収蔵された。

1975(昭和50)年1月4日、深夜の東名高速道路を一路西にむかう一群のトラックがあった。名神高速道路を経て万博公園の外周道路に入ったトラックは、公園の一角にあった倉庫で積み荷をおろした。

文部省史料館に保管されていたアチックミュージアム資料が、当館から大阪の国立民族学博物館におくられてきたのである。以後16日までに4回にわけて運ばれた資料は、トラック延べ20台分にのぼった。

半世紀以上の紆余曲折を経て、ようやく民博に安住のすみかを得たこれらの資料は、1977(昭和52)年に公開された民博東アジア展示の「日本の文化」の過半数を占めたという。実博資料もアチック資料も、そのコレクション保存・公開施設の設立に向けた模索が続けられたが、最終的には渋沢敬三自身が設立に尽力した文部省史料館と国立民族学博物館の収蔵と帰し、人間文化研究機構にまとまることになったのである。

ここでは、本来なら民博に移管されるべきところであるが、当館にある資料を紹介しておきたい。豪華な染付の大漁着物(「万祝着」)がある。漁師たちの晴着で、大漁祝などに着るもので保存状態もよく貴重である。タグにアチック資料であることが記されている。

夢のスカンセンミュージアム回遊

1925(大正14)年夏、敬三29歳の時、横浜正金銀行でのロンドン支店勤務を終え、前年に初めて訪れたスウェーデン、ストックホルムのスカンセン野外博物館=オープンエアミュージアム、オープンフィールドミュージアムでの強烈な印象を胸に、「日本にもスカンセンのようなー」との思いを携えて帰国する。

1896(明治29)年、建物を移築するだけではなく、当時の衣装を着た人を配置し、空間も用具もそそえた生活そのものを体験できる博物館が開館した。それがスカンセンミュージアムである。

スカンセン野外博物館の記憶をよみがえらせた敬三は、1936(昭和11)年、日本民族博物館の設立を計画する。1937(昭和12)年、アチックミュー

ゼアムの同人である高橋文太郎が、武蔵保谷(現:西東京市)の土地を日本民族学会に提供すると、敬三はさらに土地を購入し、今和次郎に設計を委ねて、武蔵野の民家などを移築した。

今回の展示では、その夢を“回遊展示”構想として具体的に表現するため、国営昭和記念公園内のこもれびの里に移築された旧石井家住宅の展示や、立川市役所内の展示ブースと連携した、現代版“回遊展示”も企画した。

展示開催の記録

2013年9月13日(金)～10月14日(月)

渋沢敬三が構想した日本実業史博物館(略称:実博)における「渋沢青淵翁記念室」資料のデータベース構築による成果を基に、渋沢史料館との連携研究を実施し、渋沢栄一の「青淵翁記念室」を復元した展示を試みた。

さらに、渋沢敬三が夢みた“昭和の正倉院”に収められたであろう静岡県漁村の「内浦史料」、祭魚洞文庫「旧台湾」史料、絵画、地図、写真、番付、文書・書籍、器物など、当館所蔵品を一堂に展示した。また、敬三が抱いていた“回遊展示”構想を表現した企画もあわせてご覧いただく機会となった。

展示の概要

- 1 イントロダクション: 渋沢敬三からのメッセージ
- 2 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元
 - 2-1: “御所用品目録・御収蔵品目録”のすべて
 - 2-2: 「青淵」とはー遺愛の品々ー
 - 2-3: 「竜門社」とはー語り記録された栄一の思想ー
- 3 渋沢敬三の夢みた世界
 - 3-1: “昭和の正倉院”に託してー文部省史料館と日本実業史博物館
 - 3-2: 祭魚洞の漁民資料への思いー江戸城への鯛上納と武蔵野の人々
 - 3-3: 拾われたアーカイブズー公文書拾遺
 - 3-4: アチックミュージアムから国立民族学博物館へ
- 4 夢のスカンセンミュージアム回遊
 - 4-1: こもれびの里と石井家の古文書と民具
- 5 むすびにかえて:
参考資料: 『史料館の歩み40年』・『史料館の歩み50年』
(1991・2001年、国文学研究資料館史料館刊)

渋沢記念事業公式サイト

「渋沢敬三アーカイブー生涯、著作、資料ー」
(<http://shibusawakeizo.jp/>)

2003年11月に設置された実業史研究情報センターは、青淵翁記念日本実業史博物館構想を現代的な形で実現することを目的とし、豊富な参照手段を備えたデジタル・ライブラリーの構築を目指した活動を行っている。

渋沢敬三の没後から50年にあたる2013年、渋沢敬三記念事業としてシンポジウム・講演会・企画展などの多くの渋沢敬三記念事業をセンターが軸となって企画している。

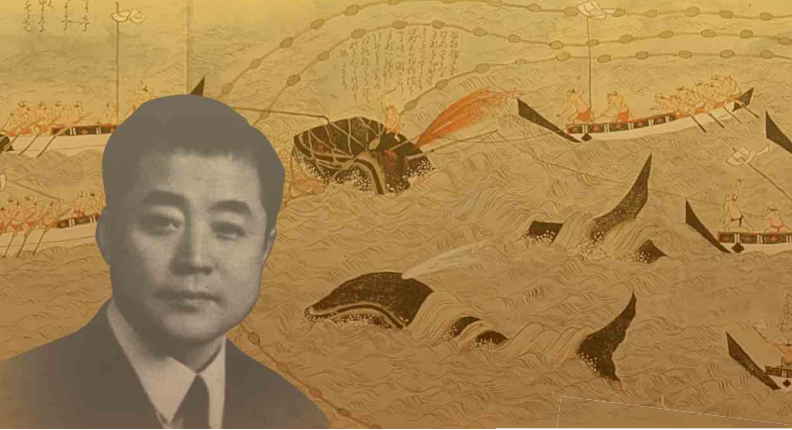
日本実業史博物館コレクションの利用案内

- 資料利用の時間は、9:30～18:00、史料・貴重書の閲覧は9:30～17:30です。土曜も開館しておりますが、時間など異なりますので、HPでご確認ください。ここで紹介した「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」の利用については、事前に学術情報課情報サービス係歴史資料担当まで電話(050-5533-2930)・メール(jouetu@nill.ac.jp)にお問い合わせください。
- 実博資料は、ホームページ<http://www.nill.ac.jp/>から「電子資料館」→「日本実業史博物館コレクション」の画像データベースをご覧ください。

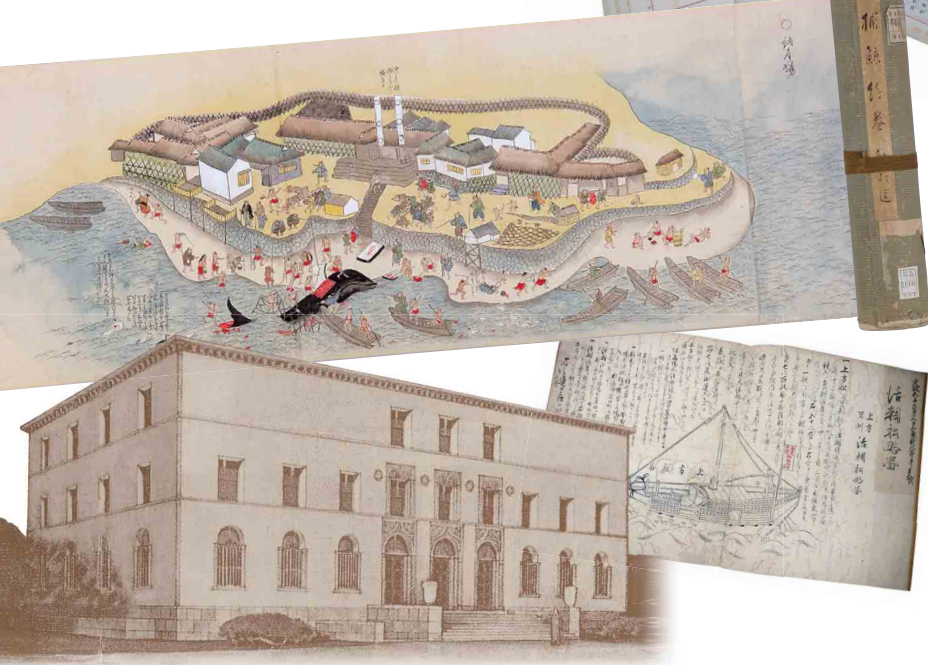
「渋沢敬三記念事業」

“渋沢敬三没後50年展示企画「復元 渋沢青淵翁記念室」に関する研究”成果報告パンフレット

編 者	青木 陸(国文学研究資料館) 「渋沢敬三記念事業」・渋沢敬三没後50年展示企画 「復元 渋沢青淵翁記念室」に関する研究”研究代表 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館 〒190-0014東京都立川市緑町10-3 TEL050-5533-2900(代)
発 行	「渋沢敬三記念事業」・国文学研究資料館 2013年10月14日
編集印刷	株式会社丹青研究所／株式会社博秀工芸



渋沢敬三の 夢みた世界



日本実業史博物館完成予想図(渋沢史料館蔵)



今和次郎コレクション
「スカンセン鳥瞰図」(工学院大学図書館所蔵)

渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元



“渋沢敬三没後50年展示企画「復元渋沢青淵翁記念室」に関する研究”成果報告



「渋沢敬三からのメッセージ」展の概要

「渋沢敬三からのメッセージ」展は、2009年から財団法人MRAハウスが助成している「渋沢敬三記念事業」における研究プロジェクト研究成果公開の一環としての企画展示である。折りしも2013年は、祖父渋沢栄一の懇望に従って実業の世界に身を投じ、戦時・戦後には日本銀行総裁、大蔵大臣などの公職を歴任、日本経済の大変革期に立ち会い、日本の民俗学・民族学を発展させて文化事業に大きな足跡を残した渋沢敬三(1896-1963)の没後50年にあたる。

没後50年に際しての「渋沢敬三記念事業」には、当館とともに国立民族学博物館も加わり、特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」(2013年9月19日～12月3日)を開催した。渋沢敬三自身が保存・公開施設の設立に向けて尽力したコレクションが一堂に展示公開され、多彩な顔を持つ渋沢敬三の優れた功績を伝える機会となった。

当館には、渋沢敬三によるコレクション資料「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」が所蔵されている。1931(昭和6)年11月11日に渋沢栄一が死去した後、現在の北区飛鳥山公園内にある敷地と建物が渋沢記念財団竜門社に寄贈された。竜門社は、この旧渋沢栄一郎の利用に関する委員会を設置し、1937(昭和12)年7月15日、「渋沢青淵翁記念実業博物館」(青淵は栄一の雅号)の建設を決議した。この決議は、委員の一人であった渋沢敬三による近世経済史博物館の建設構想「一つの提案」をベースにしたもので、これにより資料の収集・保存・管理および博物館建設計画が敬三の手に委ねられた。1939(昭和14)年5月13日の渋沢栄一生誕百年記念祭には博物館建設地鎮祭が挙行されたが、折りからの戦争による社会の激変により竣工には至らなかった。その後も「日本実業史博物館」の名称で資料の収集および展示・収蔵のための施設設置場所の模索が続けられたが、実現には至らずに終わった。まさに「幻の博物館」となった。

日本実業史博物館構想が断念された後、その準備室が収集したさまざまな資料は、1951(昭和26)年に文部省史料館(国文学研究資料館史料館の前身)に一括寄託された。そして、渋沢敬三が没する前年の1962(昭和37)年、正式に寄贈となり現在に至った。

この企画展示では、日本実業史博物館の一角を占める予定であった「青淵翁記念室」に関する資料データベース構築の成果をもとに、2009年から財団法人MRAハウスの助成を得て、渋沢史料館との研究連携を行い、「青淵翁記念室」の復元を試みた。また、渋沢敬三が抱いていた“回遊展示”構想を具体的に表現するため、国営昭和記念公園内のこもれびの里に移築された旧石井家住宅(立川市指定文化財)の展示や、立川市役所内の多目的プラザに設けられた企画展「立川の古民家～小林家住宅と石井家住宅～」(企画：立川市歴史民俗資料館)などと連携した、現代版“回遊展示”も企画した。

渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元

前述した「渋沢青淵翁記念実業博物館」建設の決議に際し、敬三は、「折角お爺さんの為に財界の人達が御考え下さっていることは大変有難いことであるが、それならばそれを敷衍した経済史的な博物館を、渋沢家も御手伝してつくりたい」として、「渋沢青淵翁記念室」「近世経済史展観室」「肖像室」の3室からなる「青淵翁記念日本実業博物館」(近世経済史

博物館、のち実博)構想を提唱し、栄一の遺品を中心とした「渋沢青淵翁記念室」のための資料収集にあたった。祖父栄一の傍らにある時、その後ろ姿は、「しっかりとした偉人というよりは、むしろ侘びしい一個の郷土血洗島の農夫の姿」であったといい、その「農夫」の姿を、孫である自身に投影したのかも知れない。

この展示は、「一見つまらぬ様な事でも、ありのまに出来得る限り集めて置かねばならぬ」として遺されたコレクションを通じて、敬三が描こうとした栄一の実像に少しでも迫っていただければと願う企画であった。

「青淵翁記念室」とは

日本実業史博物館で第一に衆目すべきは青淵翁記念室であり、渋沢栄一その人のすべてを表現する。1937(昭和12)年の展示室構想では次のようにまとめられている。

「青淵翁の一代を遺品、写真、絵画、図表等を成可く効果的に応用して如実に一日是れを知る一つの記念室であります。従而此の室に関する限り青淵翁一生の序次にならひ、経済以外の事項即ち教育、国際親善、労働問題、社会事業等凡てを網羅することになるのであります」。

そこにおける展示方針は「本室ニ於テハ青淵翁遺品写真其他ヲ用ヒ、模型絵図ゾオラマ図表等ヲ併用シ青淵翁ノ伝記ヲ可及的如実ニ且ツ簡易ニ展観シ一目ソノ一代ノ変化性多角性一貫性ヲ明瞭ナラシムルコト」というものであった。

混迷の今、経営学「マネジメントの父」、P.F.ドラッカーは、日本資本主義の父といわれる渋沢栄一を、「論語」をより所にして「道徳と経済」の一致を唱えた『倫理家』と称した。その「渋沢栄一の生涯とその事績」は、現在、渋沢史料館での展示を通して詳しく知ることができる。

“御所用品目録・御収蔵品目録”のすべて

「青淵翁 御所用品目録 御収蔵品目録」(「渋沢青淵先生手廻品目録 渋沢敬三子爵寄贈」、1946(昭和21)年12月28日)は、文部省史料館への寄贈時の目録である。記載の品々は168件に及び、そのうち165件を確認することができた。今回の企画展では、その記載順に、ありのままの遺品とお手回りの数々を展示した。

渋沢栄一日記

現存する栄一の日記は31冊あり、そのすべてが「渋沢栄一伝記資料」別巻第1、第2として刊行されている。31冊のうち、当館が所蔵する30冊以外は、渋沢栄一記念財団所蔵の日記(明治2年10月21日～11月19日)が1冊のみである。

「青淵」とは一遺愛の品々ー

青淵とは、栄一の雅号である。後に栄一自身、その名の由来について、「青淵と云ふ私の号は、私が十八歳頃、藍香先生から附けて貰った。当時私の家の下に淵があって、その関係から私の家を淵上小屋と名附けていた。それから青淵と云ふ号が出来たのである」と語った。藍香先生とは、日本の実業家で富岡製糸場の初代場長も勤めた、栄一が学問の師として仰いだ義兄尾高惇忠であった。

その青淵翁こと栄一の伝記資料編纂事業の発足にあたり、敬三は「もし私に無遠慮に小さな望を云わさして下さるならば、それは啻出来上った、成功した多くの仕事の資料以外に、どんなに、不成功に終ったりまた無駄な努力がし続けられていたかということ、たといその例証が一つ一つ挙げられなくとも、そうしたものが極めて沢山あったであろうということを考えて、それらの事業を深く検討載きたい」と言い置いている。

モノづくりの「真の成功は失敗を率直にかつ科学的に究明した上で築かるべき」という視点を持ち合わせた人物であったからこそこの言葉である。

渋沢敬三の夢みた世界

敬三は、「資料を学界に紹介・提供すること、そのための努力をする研究者の仕事を援助する・実現する」ことを標榜し、「理論づける前にすべてのものの実態を掴むことが大切」として、日本実業史博物館(当館資料)、保谷(現:西東京市)に民族学協会附属博物館を開設し、「アチックミュージアム」(国立民族学博物館資料)のコレクションにあたった。静岡県内浦で大川家文書(当館資料)を発見・整理し、のち『豆州内浦漁民史料』を刊行し、文部省史料館や水産資料館の設置を推進するなど、アーカイブズの保存にも尽力している。

1947(昭和22)年、戦後、希少な史料の散逸・破壊に拍車がかかる状況を憂慮し、史料の収集と保存公開機関設置の準備も始められた。その文部省による「史料館」の性格は、ある資料によれば、散逸の激しい近世以降の史料収集に重点をおくものの、将来は「古代より現代にいたるあらゆる史料」「考古学的遺物や民俗学的資料」、さらには「各官庁の文書類その他で学術的価値あるもの」などを対象とする、という構想が記されている。この時期に「各官庁の文書類」の保存に注意が払われている点は注目に値する。この史料館設立に尽力した敬三の夢の一端が垣間見える。

"昭和の正倉院"に託してー文部省史料館と日本実業史博物館

史料保存に対する全国的な関心の高まりをうけ、国立の史料保存機関の設置を求める声は研究者の間でも一段と高くなり、1949(昭和24)年3月、96名の学者の賛同を得て「史料館設置に関する請願」が第五通常国会の衆参両院に提出された。この請願書は社会経済史学会(野村兼太郎会長)が起草したもので、署名者には渋沢敬三はじめ小野武夫・辻善之助・野村兼太郎・上原専禄・大塚久雄・柳田国男・岩生成一各氏など、当時の主だった学者が並んだ。

請願は「日本の歴史資料は今正に空前の危機に臨んでいます」という言葉でじまり、「文化国家の再建」のための「重要な礎石」として古文書記録等の民間史料を保存すべきこと、そのため「国立の史料保管機関(史料館)」を設けることを切々と訴えている。

その年の5月31日、「文部省設置法」が成立。第九条「大学学術局の事務」の中に「史料の蒐集、保存、及び利用に関する事務を処理すること」(第十六号)の一項が入れられた。これによって、史料保存の事業は、正式にスタートすることになった。

史料館と敬三

1949(昭和24)年11月19日の施設披露の際の文部大臣挨拶において、「欧米の先進諸国におきましては、いずれも相当の規模を有する古文書館を経営し、そこに貴重な史料が安全に保管され、利用されているのに反しまして、わが国では私的小規模な施設を除きまして、いままで(こ)のような施設がなかったということは、なんと申しても遺憾に堪えない」と述べ、「欧米諸国の古文書館に劣らない大規模な国立の史料館を建設してゆきたいと念願しております」と決意を語っている。

敗戦後の実博資料は戦禍を免れたが、竜門社資産の凍結・保管場所であった旧阪谷邸の占領軍による接収という事態に至った。渋沢青淵記念財団竜門社は、昭和26年に正式に発足した文部省史料館に収集資料の寄託を決定した。

文部省史料館の設立に奔走した敬三は、設立後の昭和27年から昭和38年の12年間、文部省史料館評議員を勤めた。敬三が没する前年の昭和37年9月、改めて寄贈の手続きがとられ、実博資料は、史料館の所蔵に帰した。

まさにその当時の史料館収蔵庫は、アーカイブズ・ミュージアム・ライブラリー資料で埋め尽くされた"昭和の正倉院"であった。



日本実業史博物館準備室アーカイブズ

「実博」事業は1937(昭和12)年から始動するが、準備室が設置されたのは昭和14年末のことである。設置当初の構成員は、敬三の旧友小林輝次と元帝室博物館の遠藤武の2名である。終戦を迎えた1945(昭和20)年11月まで、基本的に両名が業務を行った。

準備室は設置当初、東京丸ノ内の第一銀行内に置かれていたが、1943(昭和18)年3月に小石川原町の旧阪谷邸(阪谷芳郎:元東京市長)に移転した。準備室の業務も移転を境に内容が変わっている。移転前の主な業務は、準備室設置以前に購入されたものも含めたコレクションの整理と、「実博」事業の資金を管理している竜門社との間での会計処理であった。コレクション購入自体は敬三の判断で行われており、準備室は敬三が購入を決定したコレクションの整理等を行った。旧阪谷邸への移転以降には、コレクション購入業務とともに、博物館の開館準備業務が比重を占める。

「準備室アーカイブズ」には、購入コレクションすべての整理・会計処理に関する文書、旧阪谷邸の維持管理に関する文書が多く含まれる点が大きな特徴となっている。博物館資料整理学の戦前史としても興味深い資料である。

祭魚洞の漁民資料への思い

渋沢敬三は、自らを「祭魚洞」と号した。この雅号は、鰯が捕らえた魚を川岸へ並べる習性を示す「鰯祭魚」という故事に因んだもので、食べもしない獲物を追い散らすその姿を、自身になぞらえたといわれる。

敬三は、大の釣り道楽であった。29歳のときに横浜の本牧で釣りの醍醐味を味わって以来、たびたび伊豆の静浦や内浦を訪れては、釣り三昧の日々を過ごした。1932(昭和7)年2月、祖父栄一死後の心身の静養のため内浦三津浜に滞在した敬三は、隣村長浜村の津元大川四郎左衛門と出会った。大川家の蔵や長屋門の中から大量の古文書を発見した敬三は、漁民生活の記録を後世へと伝え、学術研究に役立てる必要性を痛感し、各地の漁村の史料(祭魚洞文庫の水産史料)を収集するとともに、9年の歳月をかけて『豆州内浦漁民史料』全4冊を刊行した。

「原文書を整理して他日学者の用に供し得る形にすることが自分の目的」と記しているように、このときの敬三の視線は、アーカイブズを残し、活用するための土台を築くことに注がれていた。

